

I'M A PARTNER SUMMER 2015

福島から来た子どもたち

福島から来た子どもたち-YMCA Camp Yoshima



震災から4年が経ち、子どもたちの様子も変化を見せてきました。震災直後のショックや悲しみから、今度は長期的に続く原発の影響下での生活自体が大きなストレスとなって、子どもたちに、そして子どもを取り巻く家族と社会に重くのしかかっているようでした。私たちはキャンプを迎えるにあたって、多くの時間を費やしました。それはキャンプで何をして遊ぶのか、時間割はどうしようかといったことだけでなく、

「キャンプにおいて、一人ひとりが負うべき『責任』とはなにか?」という命題に向かって、ディスカッションによって真実に近づこうと準備を進めました。主に高校生、大学生から構成される若い世代のキャンプリーダーにとって「議論を交わす」ことはとても難しいことでした。しかし私たちは諦めませんでした。何とか子どもたちに希望を与えたいたい。「僕は保養慣れしてるから、感動しないんだ」春にある子どもから聞いた、そんな言葉はキャンプで聞きたくない。そう心に誓って、ディスカッションを重ねました。キャンプ当日、キャンプカウンセラーの顔には笑みが浮かんでいました。「これから始まる『キャンプ』という一つの『世界』に、一体どんなことが待っているのだろう」その顔は希望に満ちていました。こうして、福島からやってきた63名の子どもたち、若いキャンプカウンセラーとリーダーたちは、暑い暑い夏の余島でキャンプの世界に入っていきました。大変多くのボランティアスタッフに囲まれ、多くの出会いを喜び、はじけるように遊んでいました。

「リーダー。スタッフになって、また余島に帰ってきててもいい?」

キャンプから帰る前の日、いつもよりゆっくりとした朝がやってきて、まだ起きて間もない自然の中で、インフォメーションセンターの前を掃き掃除していると、子どもたちがやってきて言いました。

「今度はリーダーになってキャンプに参加したいんだ」そう思って余島から巣立っていった子どもたち。しかし、子どもたちは現実を冷静に見つめています。多くの支援者の寄付や努力によって参加できる、もしかしたら一生に一回のキャンプ。その意味をかみしめ、帰って行きました。

このキャンプに携わった全ての人々に感謝を申し上げます。福島からやってきた63名の子どもたちのためにデザインされた至宝のキャンプは、これからも子どもたちの心の中で輝き続けます。そして感動は人の心を動かし、大きなうねりとなって、新たな世界を生み出していくことでしょう。

キャンプディレクター 阪田 晃一 (神戸YMCA)

第5回 I'm a Partner サマーキャンプ2015

日 程：2015年7月26日～7月30日 4泊5日

於 : YMCA余島野外活動センター

招待数：30名（福島の小学4年生～6年生）

ボランティア数：75名（当日述べ人数）

費 用：3,176,842円（寄付金）

主 催：神戸YMCA

協 力：パートナーお一人おひとりの皆さん

Ladies & Gentlemenよしましょ、学校法人啓明学院

サントリーホールディングス㈱、余島キャンプOBOG会

生活協同組合コープこうべ、兵庫県ユニセフ協会

NPO法人ルワンダの教育を考える会

㈱光陽社、㈱毛利マーク、non-standard world, Inc.

ワイズメンズクラブ西日本区六甲部

(公財) 日本YMCA同盟

社会福祉法人神戸YMCA福祉会、学校法人神戸YMCA学園

<同時開催>福島の子ども保養プロジェクトinよしま

主 催：コープこうべ、兵庫県ユニセフ協会、神戸YMCA

Report

“お兄ちゃんが前に参加して、
家に帰ってきたらわんわん泣いて、
「キャンプが楽しかった」って”
- あるキャンパーの言葉

2年前にキャンプに参加した男の子の弟が参加していました。彼はキャンプが始まって3日経ってから私のところにやってきて、このことを教えてくれました。「だから僕は、お兄ちゃんからキャンプの歌を教わってきたんだ。『われはふくろう』家で毎日歌っているよ」キャンプが終わっても変わらない「喜び」は、子どもたちの心の中で生き続け、そして今まで新たな出会いを生んだのです。

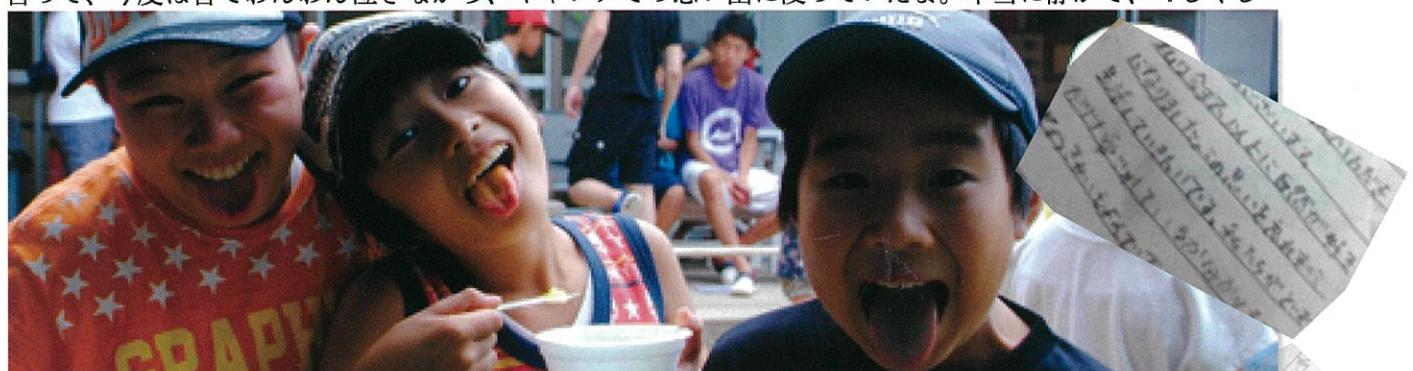


最終日の朝、朝ごはんを楽しんでいると、ある女の子が私に手紙をくれました。みんながキャンプから帰ってその手紙を開けると、この言葉がありました。きっと彼女はこのキャンプで、誰に会っても、誰と遊んでも、その背後に流れている強い愛情を感じていたのだと思います。

“私たちがどれだけ愛されて
いるかわかりました”

- あるキャンパーからの手紙

キャンプからの帰り道、港から出て新幹線に向かうバスの中で、こんなことがあったそうです。「キャンプでよく歌った歌なのか、どこからともなく歌が始まつた。でもその時、ある男の子がこう言った。「歌はやめようよ。また悲しくなってしまうから。」そう言つて、今度は皆でわんわん泣きながら、キャンプでの思い出に浸っていたよ。本当に静かで、『しくし

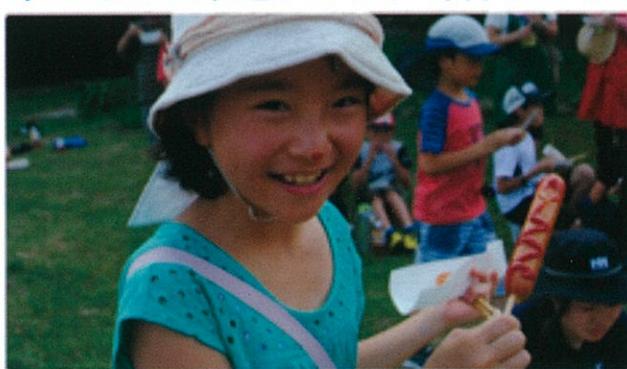


く』という音だけが響いていた。本当にいいキャンプだとわかったんだ。私も心から感動したよ。」福島まで子どもたちを連れて帰るボランティアスタッフが教えてくれた、キャンプを象徴するストーリーです。

かき氷の日 - YMCA Camp Yoshima

“子どもがお小遣いから、寄付をするというので”

- あるキャンパーの母の言葉



感動のキャンプを終えて数日が経ったある日、とても嬉しい知らせがありました。見覚えのある名前で寄付のお申し出を受けたのです。確認のお電話をしてみると、「子どもが、お小遣いから寄付をするって。少しだすけれど、キャンプのためにー」とキャンパーのお母様が教えてくれました。自分がキャンプで得た「喜び」を、自分が会うことはないかもしれない誰かのためにー。この時、このキャンプは本当に大切なことを子どもたちに伝えているのだと実感しました。キャンプに携わった全ての人々に感謝して。